

人の実体を知らない (マルコ 7:14~23)

イスラエルは神様を喜ばすつもりでやったことが、かえって神様を悲しませることになり、神様の怒りを買うことになってしまいました。結果的に悪魔を喜ばせることになりました。これは大問題です。自分は神様を喜ばすつもりなのです。しかし、それが悪魔サタンを喜ばす結果になってしまうとなれば、これこそ大問題ではないのでしょうか。でもそれがイスラエルの実体であり、またイスラエルの歴史そのものでした。なぜそのようになってしまうのでしょうか。それはイエス様が今日お話しされましたところから分かるように、人がどんな存在なのか、その実体が分かっていないとそうなるしかありません。だから、礼拝をささげる私たちは、聖書を通して聖霊のおしえによって人の実体が何かを正しく知るそのようなクリスチャンになりたいと思います。

1. 人の実体を知らない、良かれと思ってやったことが裏目に出てしまう。

まず第一に、人の実体を知らない、良かれと思ってやったことが裏目に出てしまいます。

1) 聖書だけが教える人の実体(エペソ 2:1-3)

まず聖書だけがおしえている人の実体について私たちは素直に聞いて、それを受け入れなければなりません。聖書は人の実体をこのように語っています。エペソ 2:1-3。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」。これが人の実体です。みな息をして動いているから生きていると思いますが、霊的には死んだ状態だ、死んだものだと言っています。「そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました」。私たちは好きなことをやり趣味に没頭し、自分の夢に向かって進んでいるつもりなのですが、実は目に見えない空中の権威を持つ悪魔サタンに従って歩んでいるということが人の実体です。聖書だけが私たちにおしえるものです。結果、「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」。これが人の実体です。

2) 清めの儀式とすべての戒め-キリストと絡んでいる

人の実体があったとすれば、神様が清めの儀式を命じられたことの意味が何かを理解するようになります。今日読んでいただきました聖書の前半に、弟子たちが手を洗わないで食事をするを見て、パリサイ人たちが「先祖からの言い伝えによりますと、ちゃんと手を洗って清めて臨むべきだと言われてるのに、なぜそれを守らないのですか」と言ったことに対してイエス様がいろいろおっしゃった内容です。神様がイスラエルの民がいけにえをささげて神殿にのぼるときには、必ず水で手を洗うように命じられました。それで清められてから入れるという意味なのです。その水というのは、いのちを象徴するものなのです。つまり、人の実体がいかにばんご存知の神様は、イスラエルの民が水、つまりキリストのいのちを通して清められ、それで神の前に出ることができるということを覚えてもらうために命じられた儀式なのです。そしてほかの数多くの戒めがありましたが、その戒めも人の実体がいかに分かっていれば、すべてがキリストと絡んでいるものなのです。なのにイスラエルの人々は人の実体がいかに分かっていなかったのです。その儀式と戒めの中身、つまりキリストが抜けたまま儀式、あるいは戒めだけが一人歩きすることになってしまいました。だから水で洗うことが自分自身を、人を清めるというように思い込んだわけです。キリストは抜けてしまいました。なぜそのように思うのでしょうか。人の実体がいかに分らないとそのように思うしかありません。

4) 無効化と逆効果

それで彼らは水が私たちを清めるものであれば、より徹底的にしようじゃないかと、良かれと思って神殿に入るとき以外も食べ物を食べる時にも、家に入るときにも水で手を洗えばより強くなるのではないかと考えていろいろな項目を加えて作ったわけです。良かれと思って。より強くなるために。しかし、中身が抜けたまま、つまり人の実体がいかに分かっていないまま良かれと思って頑張ったことは何の効果も生じません。無効化なのです。水で手を洗うから清められるのでしょうか。キリストのいのちによってのみ清められるということをおしえるためのものだったのに、そのキリストは抜けたまま水が私たち

を清めてくれると思ひ込み、それを徹底しようと思うようになったわけです。特にパリサイ人がその先端に立っていました。全く効果がないどころか逆効果なのです。どんどんキリストが薄れて、キリストから遠ざかり、神様の祝福とは無縁なものの方に遠ざかっていくことになります。これが人の実体を知らない、良かれと思ってやったことが裏目に出てしまうということなのです。

5) コルバン、サウル王、カトリック

その後、コルバンという言葉も出ます。神様に何かをささげるということです。それで神様はささげることを喜ばれるというふうに思ったわけです。でも、そのささげるということはキリストを通して神様に出るという感謝があり、また親を敬いなさいという戒めは、ただ道徳的に親を敬うということを神様が喜ばれるという戒めではありません。キリストをおしえる親という意味があったので、キリストと絡んで親を敬う戒めを与えました。けれども、彼らは神様にささげると神様が喜ばれる、だから、より積極的にささげようと思ひました。キリスト抜きにして。それで親にあげるべきものも神様にささげたことで、もうおしまいですよとまで言ってしまったわけです。逆効果なのです。彼らの言い伝えを良かれと思って守ろうとしてきたことが、神の戒めを破ることになってしまいました。そういうお話が記されています。これも一つの例です。サウル王という人間が、これから戦争を始めようとして、その前に神様にいけにえをささげ、礼拝をささげることになっていたのです。そのいけにえは預言者だけに許されている権限です。でも、サムエルがなかなか来ないので、サウル王はそのまま戦争に出かけるよりは、いけにえをささげ、礼拝をささげてから出た方が良くと思って、良かれと思って、自分でそのいけにえをささげることを仕切るようになったわけです。それで後にサムエルが来たとき、ものすごく怒って、そのときから神の恵みはサウル王から離れていったと言われるほどになってしまいました。なぜなのでしょう。サウル王はいけにえを神様にささげる、これ抜きにして戦争に出るよりは礼拝をささげてから出たほうが良いと、良かれと思ってやったわけです。しかし、預言者以外にはそれにタッチしてはいけないという戒めを破ったわけです。良かれと思ってやったことが戒めを破ることになります。そのいけにえをささげるというのは、ただいけにえをささげた、礼拝をささげたことが問題ではなくて、キリスト Only という意味がそこにはあったわけです。だから、預言者のほかには触ることができないよという意味があったのに、キリストは全く抜けたままいけにえをささげることにこだわって、それが裏目に出てしまったということです。カトリック教会は、十字架という模様に非常にこだわります。十字架は別に悪くありません。でも、その十字架の模様はキリストの贖いの救いをおしえるための内容なのですが、キリストの贖いの救いの本当の意味が抜けたまま、十字架だけが一人歩きします。カトリック教会では、まるで十字架にお札やお守りのようなイメージを持っています。それで十字架の前で十字を切るようなポーズをとったりして、十字架そのものに何かの効果があるかのように思ひ込むようになりました。良かれと思って十字架にこだわりましたけれども、人の実体が分かっていないまま良かれと思ってこだわることは、必ず裏目に出て逆効果になり、最終的にサタンを喜ばせることになってしまうんだということを忘れてはいけません。

6) 人権、平等、心理学、瞑想

教会なのに良かれと思って人権、人権と強調するようになると、良かれと思ってやったことが、最終的に教会がジェンダーの問題を許可する方向に進むようになってしまいます。教会なのに良かれと思って平等、平等を強調してしまいます。その結果、人の実体が分かっていないまま人権を取り上げたり、平等を強調したりすると必ず裏目に出てしまいます。それで教会の中から宗教多元主義が生まれ、どこの宗教でも全部良いもので救いはあるよという方向に世界中の教会が傾くことになりました。忘れないように肝に銘じましょう。聖書がおしえる人の実体が分かっていないまま良かれと思ってやったことは、必ず裏目に出てしまいます。教会で良かれと思って、世の中の学問の心理学を導入し人を癒そうという思いは良いのですが、そうすると最終的に教会なのにヒューマンイズムを極めることになります。心理学はヒューマンイズムの極みなのです。役に立つところがあることは言うまでもありません。しかし、正解はありません。なぜ心理学にすべてをかけてしまうのでしょうか。人の実体が、特に聖書がおしえる人の実体が分かっていないと教会でさえそうなります。ひどい場合は、教会で瞑想なども取り入れる場合があります。良かれと思ってその人の内側を磨いて啓発しましょうという意味でやります。瞑想という単語を使わなくてもさまざまなプログラム、教育のスケジュールなどを見ますと、同じ内容なのです。人があまりにも無気力なので、内側にあるその人の何かを絞り出して引き出そうという良かれ

とやってやったことなのに、最終的には悪霊とくっつくようになります。人の実体を知らないで良かれと思ってやったことがどういう結果になるのか、クリスチャンの私たちは肝に銘じて覚えていないといけません。

7) 宗教の儀式

教会だけではなくて、世の中は言うまでもないでしょう。さまざまな宗教があります。宗教にはいろいろな教えがあり、また特に儀式がたくさん備えられています。私たちがすぐに分かるようなことにしても、浅草寺みたいなどころに行きますと、煙をいっぱい浴びて何か効果があるかのようにします。煙によって何がどう変わるのでしょうか。もちろん病気が治る場合は、科学的な反応によってあるかもしれませんが。そういう意味ではなくて、何か変わるかのようなイメージを持ってやるでしょう。人の実体が分かっていないので、煙に頼ります。また、何かの銅像みたいなものがあって、自分の悪いところと同じ部分を触ると自分のそこも良くなると思い込むと良くなるといったことが、心理的な効果によって生まれる場合もなくはありません。しかし、人の実体が分かっていないので、宗教ではそのようなことをしたり供えたりするわけです。エペソ 2:1-3 を先ほど読みました。それが人の実体です。それがどこか触ることによって人は変わるものなのでしょうか。知らないからです。知らないから。残念なのは、教会に通っている人、タラップンの教会に来てまで、人の実体を心から素直に認めないまま、依然として良かれと思ってさまざまなことに走ってしまいます。もちろんイスラエルだけではなくて、日本のさまざまな宗教にも水で何かを洗うという儀式はほとんどあります。それで清められると思うわけです。なぜそういう水などにこだわるのでしょうか。人の実体が分かっていないので、それで良かれと思って煙などを触ったり、水などにこだわるのですが、それが霊的に傷を負うようになり、結果的に自分の内側に暗闇のやぐらを立てていくようになります。最終的には取り返しのつかない失敗につながるようになります。人の実体を知ることがどれほど大切なことなのかということ、礼拝をささげているみなさんはぜひ心に覚えましょう。人の実体を知らないとい何もかもが全部裏目に出てしまうんだということ、今日の聖書を通して改めて確認しましょう。

2. 人の実体を知らない、勘違いから抜けられない。

それから今日読んでいただきました聖書の箇所は、それをもってイエス様がたとえ話をして、弟子たちが意味が分からなくて質問したときに、それに対して説明した内容です。つまり、人の実体が何かを知らない、勘違いから永遠に抜けられなくなります。勘違いから。今日の聖書の箇所に、イエス様が手を洗うことにこだわる彼らに対して、外から食べるものが人を汚すものではない。外から食べるものは食べて消化されて出るものだとおっしゃいました。もちろん汚い手で食べ物を食べたときに、衛生的に問題があるということは別の話です。それが人の心を汚すようなものではないということです。むしろ、人の内側から出るものが人を汚すものなんだというお話をされたわけです。

1) 生まれる時、白紙の状態生まれる

人の実体を知らないといどのような勘違いに囚われるようになるのかと言いますと、人は生まれたときに白紙の状態生まれるというふうに思い込んで、その勘違いを正解としてずっと抱えて生きていくようになります。今このお話を聞いているみなさんの中でも、赤ちゃんが産まれたばかりのときには天使のようで何の汚れもない白紙のような状態だと思っているかもしれません。

2) 外部の要因で汚れる

なので必ず外部の何かによって、そこに汚れが付いてどんどん汚くなっていくというふうに世の中では教えているし思い込んでいます。しかし聖書は、イエス様の今日のお話は、それは勘違いなんだ。なぜそのようにみな思い込んでいるのかと言いますと、罪人の特徴なのです。人の実体を知らないからです。教会に通っていても聖書が人の実体をこのようなのだとおしえているにもかかわらず心から認めたくないのです。「そんなまさか。今生まれたばかりの目に入れても痛くないようなこの私の赤ちゃんが汚れていると言うのか」ということなのです。だから教会に通っていても、福音もキリストを Only も何も私とは関係ありません。2部の礼拝でもそういうお話をするつもりなのですが、私の子どもがどうすればうまくいくのかのためにイエス様を信じます。「もし子どもに問題がなくなれば、その後イエス様を信じる理由は何になるのでしょうか」と聞いたときに、「それはこれから考えます」という人は

実際にいました。こちらの教会に。人の実体が何か分からないと全部がズレてしまうのです。良かれと思ってやっていることも裏目に出てしまうし、勘違いから永遠に抜けられません。

3) 教育、環境、愛情、制度等に希望を

本当に人は外部の要因によってどんどんダメになっていくものなのでしょうか。だから、世の中では教育に力を入れます。また、環境を整えようとしています。より深い愛情にこだわりたいと訴えています。さまざまな社会制度を整備しましょうと、そういうところに希望を託そうとしているのです。もちろんそれがいらぬという意味ではありません。しかし、それに力を入れる理由の根本の方に何かあるかと言いますと、人は本来、大丈夫なのに、教育が足りないから、環境が険しいから、愛情が欠けているから、社会制度に問題があるからこうなるんですよと思っているのです。だからそういうことに力を入れようとしています。

4) ~せい、心の傷

なので結局、人の実体を知らないで、何かのせい、誰かのせいという思い込みから絶対に抜けられません。教育が足りないから、親が変だったから、私の周りの環境が、戦争だったから。ごく当たり前にみなそう思うでしょう。その根底には、人の実体が分かっていないので、人は元々、白紙のような状態で、そこに外部のさまざまな悪い要素が入ってきて汚していたのでああいう人間になった、ああいう国になった、ああいう社会になったと言いたいわけです。だから、心の傷から自由になることができません。心の傷は何でしょうか。何かのせい、誰かのせいという思い込みでしょう。

5) 人の実体を改めると-腐敗した内側から汚れものが出る

しかしみなさん、今もう一度読むことはやめますが、エペソ 2:1-3、そこだけでも聖書全体の表現なのですが、人には義などは存在しない。汚れたもののようなものと聖書の表現は最初から最後まで人間はどうしようもない罪人なんだ。生まれながら御怒りを受けるしかない存在だと、人の実体を表現しています。人の実体が何かを改めて分かったならば、外部の要因によって汚されるのではなくて、元々、内側が、心の根本が腐敗していて、そこから汚れが出るんだと。何か悪いものにぶつかって人が変わるのではなくて、元々、腐敗しているものを持っていて、さまざまな環境にぶつかったことによってこれが花を咲かすだけなのです。これをなぜクリスチャンの私たちが認めようとしませんか。人の実体を認めないと、みなさんがこれから信仰生活を良い方向に頑張ろうと、良い人間になろうと頑張る、良かれと思って工夫するすべてが裏目に出るということを心に覚えましょう。勘違いから永遠に抜けられません。人は元々、大丈夫なのに、無限の可能性があるので、外部のさまざまな要因によってダメになるだけなんだとそこを主張するのがヒューマニズムです。そして、そこをどうにかしようというのが瞑想運動なのです。本当にそうなのでしょうか。すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない。一から百まですべてが悪だというのがローマの手紙の証言なのです。これは人の悪口をするための話ではありません。でも、人間が本能的に拒否するから教会も講壇もこの話をやわらかくしようとどんどんしなくなりました。となると結果的に、どこの宗教でも同じなのです。キリストなどはいりません。どんどん離れていくようになります。キリストではなくて、ほかの何かにこだわり力を入れるようになるしかありません。そうすると悪霊が勝利します。悪霊が勝ちを宣言します。負けているのに。これが今日の聖書の箇所のメッセージです。

3. 人の実体を知ると、キリスト Only になるしかない。

だから結論として申し上げますと、人の実体を知り、素直に認めると、キリスト Only になるしかありません。水ではありません。水はキリストを象徴する内容だけであって、水そのものが人を清めるわけではありません。人の内側を清めない限り、外部の要因によって汚されるのではなくて、元々、根本の内側が腐敗しているので、そこを清めない限り人は変わることはありません。人に救いも希望などもありません。その腐敗している内側を清める方法は、キリストの他にはありません。罪のないイエス・キリストが代わりに死んで血を流してくださること以外に方法はあります。なので、人の実体が本当に分かれば、他人と比べることも愚かなこと、恥ずかしいこと、無駄なことになるということが理解できるし、今までこだわっていたものがいらぬというわけではありませんが、正解でもなんでもありません。それほどこだわって勘違いに囚われる理由などありません。キリスト Only になりましょう。ここ

に自由があります。どのような理論が、どのような法則が、人の内側の腐敗を清めることができるのでしょうか。教育でしょうか。深い愛情があれば人は変わるのでしょうか。嘘なのです。キリストの他にはありません。キリストだけなのです。誰かを憎んだり、恨んだり、やめましょう。その人があなたのために命をかけてくれたとしても、あなたは根本から変わることはありません。子どもに何が必要なのでしょうか。このキリストにあって愛情もすべてが新しく始まります。私たちの脳細胞の中には人の実体知らないまま出来上がったさまざまなものが入り込んで、混ざってゴミ屋敷のようになっているのです。そこをまず掃除しないとイケません。

今日のメッセージを通して人の実体を聖書がおしえている通りに知り、それを素直に認めて、キリスト以前のすべてをちりあくと告白して新しくスタートしましょう。それから、人は白紙で生まれるんだという白紙を前提にできたすべての理論をちりあくと切り捨てましょう。そして、世の中では、人はこういうふうになれば変わるよ、清められるよ、変えられるよと思って主張されたすべての方法があります。そのすべてをちりあくと認めて切り捨てましょう。それでパウロの信仰告白が皆さんの告白となり、できればこの聖書の箇所を今週、誰もいないところで声に出して、大きな声で100回ぐらい読んで、100回ぐらい書き写してみてください。そうすると、この箇所がみなさんの脳細胞に刻印されます。だいたい100回ぐらい。そうすると、みなさん自分自身が私はここまでだと決めつけているところが変わります。みなさんの脳細胞に別のものが刻印されて、考えが変わり始めると、今まで考えたこともない自分と向き合うようになります。ピリピ3：7-8「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。それは、私には、キリストを得」。

(祈り)

恵み深い父なる神様。人の実体を聖書がおしえている通りに受け入れて素直に認めることで、Only キリストの信仰に立って、そして、その意味が刻印されることで、良かれと思って繰り返されているさまざまなことを、自分の脳細胞からちりあくと宣言し、切り捨てる勇気をひとりひとりに与えて、キリストから新しくスタートする自由の力を体験するように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン